# 包摂する Mississippi 川と Magnolia
## ——*Show Boat* における「黄色」あるいは「黄金」の表象——

西岡　かれん

### はじめに

Edna Ferber の小説のなかでも 1926 年に出版された *Show Boat* は最も広く読まれ、複数回にわたり、演劇化、映画化[1]もされた。McGrow が以下のように述べている通り、出版以来、*Show Boat* は批評家たちによって主に人種問題を扱う作品として捉えられてきた。

> Because of its treatment of many issues pertinent to American literature in general—racial tension and passing among them—critics have considered *Show Boat* alongside texts ranging from Frances Harper's 1892 *Iola LeRoy* to Nella Larsen's 1929 *Passing* to Mark Twain's 1885 *Huckleberry Finn*. Due to these various iterations and treatments, *Show Boat* has probably left the widest track on American imagination of all of Ferber's novels. （McGrow, 48）

とりわけ、McGrow と Smyth は Ferber の *Show Boat* 論のなかでも人種をテーマとした重要な論文を発表している。McGrow[2]が *Show Boat* で描かれる人物たちの人種的な曖昧さや、人種のパフォーマティブな側面について論じた一方で、Smyth[3]は主人公 Magnolia と混血女性 Julie の身体的な特徴が類似していることに注目し、Magnolia が混血女性に近い性質を持つことを論じた。

このように人種が中心的な論題に上がってきたためか、*Show Boat* に登場する「色」については従来登場人物たちの肌の色ばかりが強調されてきた。本稿は、これまでの人種をテーマとした議論の流れを汲みつつも、あまり注目されてこなかった、Mississippi 川の色や show boat 内の劇場の光が繰り返し"yellow"、"tawny"や"golden yellow"と描写されることを起点とし、それと yellow girls と呼ばれた混血女性や、小説の主人公 Magnolia との関連を論じることで、Ferber のマイノリティへの視線や、主人公の人物造形について新たな解釈を加えることを目的とする。

### 1.　被差別者を表象する「黄色い」Mississippi 川

#### 1-1. Mississippi 川と色の表象

本作品において、Mississippi 川は影のヒロインといえるかもしれない。Mississippi 川は、単に劇団一座が移動する水路としてだけでなく、Magnolia が夫 Gaylord と出会い、娘 Kim を出産し、父親 Andy を水難事故で失うなど、彼女の人生にとって重大なイベントを経験する場で、"On the rivers the three great mysteries——Love and Birth and Death——had been revealed to her." (192) とも書かれている。本文全体で、川の代名詞に必ず"she"が使われるだけでなく、"hungry mother" (10) や"savage mother" (188) と書かれたり、主人公 Magnolia とその母親 Parthy が共に川に喩えられたりし ("She [Parthy]'s the one, after all, who's like the Mississippi." (198), "There's something about her [Magnolia] that's eternal and unconquerable—like the River [the Mississippi River]" (299))、Mississippi 川は明確に女性として擬人化されている。

このように擬人化される川の色が"yellow"、"tawny"あるいは"golden yellow"であると繰り返し描写されることと、川が持ちうる人種的意味合いを深く関連づけて論じた研究はこれまでにない。Wood[4]は、*Show Boat* のミュージカル版において"Ol' Man River"という曲が作られ、有名になったことを引き合いに出して、小説では女性として描かれた Mississippi 川がミュージカルでは男性化されたことに疑問を呈し、川とジェンダーに関する議論を展開した。しかし、そこでも人種の問題については触れられなかった。本論ではまず、Mississippi 川の色に注目し、それがこの小説の中でどのような意味を持つのかについて考察する。

### 1-2. Mississippi 川と混血女性 Julie

"Y[y]ellow"、"tawny"あるいは"golden yellow"で、女性として擬人化され、ときに "snake" "serpent" や"tiger" "tigress"などと動物にも喩えられる Mississippi 川と、Spain 系であると嘘をつき、白人と黒人との混血女性であることを隠して白人として一座の女優を務める Julie の関連については、McGrow が以下のように述べている。

> Parthy calls Julie "'that slatternly yellow cat,'" mingling color both with sexual availability and dehumanizing insult. This phrase also uses natural imagery to connect Julie to the Mississippi, variously termed a "tawny tigress," "big yella snake," with "golden yellow skin" (88,9,11,10). Through Ferber's characteristically strong imagery, both Julie and the river are encoded in ways that are natural and powerful. (McGrow, 54)

Mississippi 川は、その色や動物に喩えられるところから、*Show Boat* の女性登場人物のなかでもまず混血の女優 Julie を想起させる存在である。Julie だけでなく、黒人と白人の混血である女性は当時、俗に"yellow girls"と呼ばれていた。[5]

McGrow は Parthy が Julie を“that slatternly yellow cat”と呼んだことから彼女の“sexual availability”にも触れているが、これは Julie の女優という職業柄と混血であるという人種的特性を考えると、重要な論点である。次節で詳しく述べるように、Julie は白人に性的に搾取される存在として描かれる。

### 1-3. 白人男性による性的搾取の対象としての Julie

Ferber は *Show Boat* のなかで女性登場人物たちを幾分紋切り型に描いている。Julie に関しては、McGrow が述べるように、混血であるにも拘らず白人の夫を持っていることが露呈し、当時の南部の法律[6]に基づいて罪に問われそうになり、職を奪われ、社会的に堕落していく典型的な“tragic mulata”として描かれる。

> The character of Julie, around whom the mixture plot circulates, is not a melting-pot heroine but instead falls under the nineteenth-and early twentieth-century American literary rubric of tragic mulata—in which a mixed race woman, often attempting to pass for white, meets a troubled end. （McGrow, 50）

まず、Julie の当時の立場を彼女の職業と人種という二つの面から考察したい。フランスの演劇批評家 Jules Poignard が指摘しているように、女優は男性観客から性的な視線を向けられる存在だった。

> The average male spectator was to fantasize about sleeping with one of the actresses before him. We do not believe in the virtue of theatre women. We know them to be, for the most part, available for affairs. （quoted in Berlanstein's *Daughters of Eve: A Cultural History of French Theatre Women*, 107）

これは *Show Boat* の舞台となっているアメリカでも同様で、作品のなかで町の人たちは show boat の一座を“Show Folks”と呼んでおり、その呼称には“string of opprobrium”（40）が含まれていると書かれた。また、Andy は show boat のオーナーになると決めたとき、妻の Parthy に“bawdy-boat”（51）を経営するわけではない、と説明せねばならなかった。それほど役者という職業には性的に堕落しているイメージが植え付けられていた。

また一方で、混血の女性は、Smyth が“Mixed-race women not only are the product of white male rape and exploitation of Native and African American women, but also have the potential to bear mixed-

race children.” （77）と論じているように、白人男性による性的搾取の産物であり、自らも常にそういった搾取の対象となりえた存在である。

このことから、Julie は職業、人種という二つの枠組み[7]において、蔑まれ、特に性的な意味合いで搾取される弱者であったということがわかる。一座を追われた Julie を、数十年後、Magnolia はシカゴの娼館で見かける。Julie が娼婦として働いているのか、娼館オーナーの秘書として働いているのかは明確にはされないが、彼女はここでもまた、男性によって性的に搾取される場に身を置いている。そして Mississippi 川は Julie との関連を通して、まず、被差別者・被搾取者を象徴する存在として読み解くことができる。

## 2. 「黄色」あるいは「黄金」の Mississippi 川とその包摂力

### 2-1. Andy を取り込む Mississippi 川

Mississippi 川は Julie のような人種・職業の女性を象徴しながらも、弱者としての姿ではなく、他のすべてを飲み込もうとする力強い存在として描かれる。

> The Mississippi itself was a tawny tiger, roused, furious, bloodthirsty, lashing out with its great tail, tearing with its cruel claws, and burying its fangs deep in the shore <u>to swallow at a gulp land, houses, trees, cattle——humans, even; and roaring, snarling, howling hideously as it did so</u>. （3, 下線筆者）

Julie 自身に関しても、“tragic mulata”としての悲劇的な運命を辿るものの、やはり弱者としてばかりではなく、Magnolia に積極的に関わったり、Parthy の指示を拒んだりする主体性に富んだ人物として描かれる。彼女は厳格で禁欲的な Parthy の支配下にある Magnolia に男女の愛について教える擬似的な母親の役割を果たしている。Julie は人種および職業の観点からは性的な搾取の対象であったかもしれないが、夫 Steve との関わりにおいてはそうではなく、能動的に恋をする女性として描かれる（“The two [Steve and Julie] were very much in love”）（69）。Julie は、性に対し極度に否定的で、彼女が妊娠しているときでさえも“simply could not utter the word ‘pregnant’ or say, ‘while you are carrying your child,’ or even the simplest evasion of her type and class——‘in the family way’”（176）な Magnolia の母親 Parthy とは正反対の存在である。Parthy は結婚し子供をもうけてもなお“spinster-like”（19）であると書かれ、一貫して性的な要素を否定し、抑圧する。Magnolia にとっては、川も Julie も同様に、Parthy の抑圧的かつ支配的な影響力と相反する自由で解放的な存在[8]であった。

Magnolia は Julie と夫 Steve がキスをするとき、Julie の肌の色が金色に変化する様子を目撃

する。Magnolia は、“never witnessed a like passage of love between her parents”（69）であったので、それは彼女が初めて大人の男女が性的に接触する場面を見た瞬間だった。

> Her [Julie's] sallow colouring had taken on a tone at once deeper and clearer and brighter, like amber underlaid with gold. Her eyes had widened until they were enormous in her thin dark glowing face. It was as though a lamp had been lighted somewhere behind them. （69, 下線筆者）

数年後、Magnolia がのちに夫となる Gaylord と出会い恋に落ちたとき、彼女の肌は Julie の肌と同様に輝き始める。

> Her [Magnolia's] skin was, somehow, softly radiant as though lighted by an inner glow, as Julie's amber colouring, in the years gone by, had seemed to deepen into golden brilliance. （141, 下線筆者）

Julie と Magnolia が主体的に恋をし、性を解放するときの肌の色は、荒れ狂って危険な状態になり、船を難破させようとする直前の（一見穏やかに見える）Mississippi 川の色と共通している。荒れる可能性を秘めた川を描写している Mississippi 川の色は金色（“golden yellow”）と表現される。

> And because the tigress lay smooth and unruffled now, with only the currents playing gently below the surface like muscles beneath the golden yellow skin, they fancied that she would remain complaisant until they had had their way. （9, 下線筆者）

荒れる前の川の色は、普段は性的に搾取される側であった女性が、主体的に恋愛をして自ら性的であることを楽しむときの肌の色と同じである。女性が能動的に性的になるとき、その性は男性に搾取されるものではなく、逆に男性を暴力的に取り込みかねない力強さを持つことになるのかもしれない。なぜならついに、川は、Magnolia の父親である Andy をそのとぐろ（“coils”）に取り込み、よりきつく（“tighter”）より深く（“deeper”）捉えて離さず、殺してしまうからだ。

> Up, down, fore, aft—suddenly he [Andy] was overboard unseen in the dimness, in the fog,

> in the savage swift current of the Mississippi, wrapped in the coils of the old yellow serpent, tighter, tighter, deeper, deeper, until his struggles ceased. She [The Mississippi] had him at last.（100）

ここで、これまで性的に搾取される側にいる女性に重ね合わされた「黄色い」Mississippi 川が、被差別者・被搾取者としてのイメージを覆し、彼女たちを搾取する側の立場にある白人男性[9]を象徴し得る Andy を自らのなかに満足げに取り込み（“she had him”）、死に至らしめる。Ferber はこのように、川を使い、性的搾取の対象である女性が、能動的に性を解放するときに持ちうる力強さや暴力性を表現し、搾取する側とされる側の関係性が常に転覆する可能性を持つことを示唆した。Mississippi 川は、暴力的なまでの包摂力を持ち、差別者・搾取者を飲みこむことで差別構造そのものを乗り越えてしまうのである。

### 2-2.　Parthy を取り込む Mississippi 川

「黄色い」イメージを通し Mississippi 川と結びつけられる Julie と最もかけ離れた存在なのが Parthy である。前章で述べた通り Julie は白人男性から性的に搾取される立場だったが、同時に Parthy のような白人女性からは疎まれ、蔑まれる立場でもあった。

Julie が社会的な傍流に位置する、当時差別/弾圧される側にいたマイノリティ側の女性であるならば、Parthy は中流階級の白人であり、マジョリティ側の女性である。語り手は Parthy について、“She belonged to the tribe of the Knitting Women; of the Salem Witch Burners”（25）と表現し、マイノリティを弾圧する側の人間であることを明示的に表している。

ヴィクトリア朝の価値観を持った当時の白人女性は、Wood が“Parthy represents the rigid censoriousness of Victorian womanhood and expresses a puritanical disdain for the theatre.”（323）と述べているように、劇場を蔑視していた。Berlanstein はヴィクトリア朝の中流階級では、女優は“a grave threat to social order”（115）と認識されていたと述べている。そのため、Parthy は夫 Andy が show boat の船長になると決めたとき、興行師（“showman”）（50）の妻になることに強い抵抗を感じて、“matronly Christian martyr”（50）のような面持ちになり、船での生活が始まってからも、女優たち（特に Julie）に対して強い軽蔑の念を持ち続けていた。

Parthy が意に反してそのうえで生活することになる Mississippi 川は、彼女に代表される社会的多数派が持つ Victorian で抑圧的な影響力と対比をなし、自由で力強く、主体的で、解放的な存在として描かれる。そしてそのイメージはそのまま Julie のイメージとも重なる。

Parthy は川のもたらす解放的な作用に対して必死で抗おうと（“met beauty and adventure and defied them to work a change in her”）（48）する。しかし、以下のように、川での生活が長くな

るにつれ、少しずつ川の気楽で怠惰な生活や周りの“unconventional”な人間たちの影響を受け、変化していく。

> It was inevitable, however, that the ease and indolence of the life, as well as the daily contact with odd and unconventional characters must leave some imprint on even so admantine an exterior as Parthy's. Little by little, her school-teacherly diction dropped from her. Slowly her vowels began to slur, her aren'ts become aint's, her crisp New England utterance took on something of the slovenly Southern drawl, her consonants were missing from the end of the word here and there. (95)

夫亡き後、Parthy は自ら show boat のオーナーとなり、ついには、夫 Gaylord と娘 Kim とともに川を去るとき、Magnolia が“She [Parthy]'s like the River,”… “She [Parthy]'s the one, after all, who's like the Mississippi.” (198) と言うようにまでなる。Parthy は、自身があれほど蔑んで“yellow-skinned Julie” (143) や“yellow cat” (96) と呼んだ Julie と同じ色の、そして同じ価値観を擁する川と同化するのである。ここでも、Ferber は川を使い、差別の対象であるマイノリティの価値観の波及力を表現し、差別する側とされる側の関係性が流動的であること、ひいては差別される側が差別する側の価値観をも自らのなかに包摂し、差別構造を無効化し得ることを伝えている。

小説中盤に登場する、Parthy が show boat を去る Magnolia を見送るときに、Magnolia が母親を「川そのものだ」と表現するシーンは、小説の最後で Magnolia が娘 Kim を同じ場所から見送るシーンでそのまま繰り返される。このときは Kim が “There's something about her [Magnolia] that's eternal and unconquerable——like the River.” (299) と、先述の Magnolia が母 Parthy を例えたのと類似した表現で今度は Magnolia を川に例える。

どちらのシーンも、Parthy あるいは Magnolia が Mississippi 川と同化していることを示しているが、その意味合いは異なっている。Parthy の場合は、川（あるいは Julie）の価値観が、Victorian な価値観を切り崩し、抗う Parthy を凌駕したこと、つまりは多数派の価値観による覇権の転覆と本来は少数派のものであった価値観の浸透を示しているのに対し、Magnolia の場合は、追放された Julie に代わり、彼女自身が川（Julie）の価値観をより強化した形で再構築することに成功したことを示している。この Magnolia の人物像については、次章で詳しく述べたい。

### 3. 「白くない」Magnolia の包摂力

### 3-1. 選択的に“yellow girl”になる Magnolia

Smyth が“Magnolia’s name and her resemblance to that white flower are typical Ferber ironies. Magnolia is neither as fragile nor as white as the pristine southern flower”（80）と論じているように、Magnolia はその名前が表すような典型的な白人の Southern Belle ではない。彼女は *Show Boat* で描かれる紋切り型の女性のなかで唯一、ステレオタイプ的な表現を免れる登場人物である。

彼女は前章で論じてきた人種的・職業的な側面において、幼い頃からマイノリティの側に共鳴し、敢えてそちらに身を置くような動きをする。3 章では、混血女性および show boat の劇場の光がともに“yellow”あるいは“golden yellow”と表現されることに注目して論を進めたい。まずは、人種的な側面について述べる。

Basque 系の父親 Andy の濃い肌の色を受け継ぎ、母親 Parthy から“Black enough”（88）なのでこれ以上日焼けをしないようにと注意されるほど浅黒い少女であった Magnolia は、Parthy による阻止をものともせず、幼い頃から show boat の使用人である黒人たちのコミュニティに馴染んで育つ。以下の一節が表すように、Magnolia にとって、黒人の夫婦 Jo と Queenie と共に過ごす台所が“a place of pleasant smells and sights and sounds”であり、将来に必要なスキル（歌手として必要な歌と家庭で必要な料理）を学ぶ「家庭」としての機能を果たしていた。

> Magnolia liked to loiter in the big, low-raftered kitchen. It was a place of pleasant smells and sights and sounds. It was here that she learned Negro spirituals from Jo and cooking from Queenie, both of which accomplishments stood her in good stead in later years. （89）

彼女の黄ばんだ肌の色（“sallow colouring”）（69）は、彼女を non-white な人たちと有機的に結びつける役割を果たしたのかもしれない。なぜなら彼女は Elly など、いかにも白人らしい容貌の役者たちとはほとんど交流しないからだ。“yellow girl”である Julie は Magnolia の母親代わりの存在であり、彼女に世渡り術や男性との接し方を教え、演劇で使う衣装を着せてみたり、一緒に外に遊びに行ったりして、彼女を導く存在である。そこでは Parthy と Magnolia の間にあるような支配的な母娘関係ではなく、より対等で、かつ親密な共感と信頼に基づく友人同士に近い関係性が築かれる。Magnolia の黒人に対する共感は彼女が大人になってからも健在で、夫の借金を返すために悲痛な思いで娼館を訪れたとき、見知らぬ黒人の姿をみて安心感を覚える（“Magnolia did not know why the sight of this rather sad-eyed looking black man should have reassured her.”）（262）。

幼い頃から黒人のコミュニティに身を置き、黒人たちを家族のように慕って育った彼女は、夫と離別後、黒人霊歌を歌う歌手として成功をおさめる。初めてオーディションに行ったと

き、彼女はマネージャーに“You nigger?”（271）や “…I’ve seen ’em lighter’n you…Your voice sounds just like a——”（272）と言われ、見た目と声の両方から黒人（混血女性）と間違えられる。Smyth が言うように、Magnolia はここで一時的に混血女性として通用（“momentarily ‘passing’ as a mixed-race woman”）（82）している。黒人霊歌の歌手という職業を志すことで、Magnolia は選択的に差別される側の（Julie のように“tragic mulata”となりうる）“yellow girl”のアイデンティティを身にまとう。

### 3-2. 劇場の黄色い光を憧憬し女優になる Magnolia

Magnolia は show boat の役者たちに対し、町の人が抱く“string of opprobrium”（40）や、Parthy が抱く“a puritanical disdain for the theatre”（Wood, 323）などを全く持っていない。幼い Magnolia は自然と黒人たちに惹かれていったのと同様に、はじめから劇場への憧れの念を持っている。父親が show boat を所持するまえから、Magnolia は家の窓から劇場の光を見るのが好きだった。

> Magnolia hungered for a glimpse of these forbidden delights[…]At night from her bedroom window she could see the lights shining <u>golden yellow</u> through the boat’s many windows, was fired with excitement at sight of the kerosene flares stuck in the river bank to light the way of the lucky, could actually hear the beat and blare of the band.　（40, 下線筆者）

“G[g]olden yellow”と表現される灯油ランプの光に照らされる劇場の色は、奇しくも荒れ狂うまえの Mississippi 川の色（“golden yellow skin”）（9）や、夫とキスをするときの Julie の肌の色（“like amber underlaid with gold”）（69）と同じである。また、別の箇所でも、Magnolia は特に劇場の黄色い光（“yellow glow”）の色を愛したと書かれている。これも Mississippi 川（“yellow”）と Julie の肌の色（“yellow”）を連想させる。

> Doc began to light the auditorium kerosene lamps whose metal reflections sent back their <u>yellow glow</u>. … Of all the hours in the day this was the one most beloved of Magnolia’s heart. She enjoyed the stir, <u>the colour</u>, the music, the people.　（75, 下線筆者）

このように劇場の黄色い光を憧憬した Magnolia は、成長すると、やはり Parthy の強い反対にあいながらも、show boat の女優として活躍するようになる。のちに選択して“yellow girl”になるのと同様に、卑下される対象であった show boat の女優という職業を率先して引き受け

る。

### 3-3.「黄色い」価値観とそれを強化する Magnolia

Mississippi 川と劇場と Julie は「黄色」（“yellow”）および「金色」（“golden yellow”）という表現を通して相互に関連付けられる。そして三者とも、黄色い肌の色を持つ混血女性という人種的被差別者を連想させながらも、当時の多数派による保守的・抑圧的な（Victorian な）価値観に抗うだけでなく、それらを飲み込んでいく包摂力を持つ力強く新しい価値観を象徴する。

Magnolia は、Andy のように暴力的に取り込まれるのでも、Parthy のように抗いながら同化していくのでもなく、自ら望んで「黄色い」価値観に染まっていく。McGrow は、Magnolia が show boat を去る Julie に別れの挨拶をするとき、抱き合う二人のシルエットが一つになるシーンを引いて、“Without Julie, Magnolia’s identity keeps blending with hers”（56）と書いている。Magnolia は、主体性があり、力強く、自由で、解放的であったにもかかわらず、その人種的なディスアドバンテージから“tragic mulata”として転落していった Julie の代わりに、彼女の価値観を再生し、強化する。

Julie の足跡を追うように、自ら選んで差別される側の立場に身を置いた Magnolia は、ある町では女優を“burning brand”（161）とみなす牧師によって彼女を写した写真に「迷える魂（“A LOST SOUL”）（161）」と書いたポスターを貼られてしまうなど、差別的な扱いを受けることもあるが、Julie が社会的に堕落していったのとは反対に、最終的に経済的・社会的な成功をおさめる。

本稿 2 章では、*Show Boat* のなかで「黄色」や動物のイメージを通して被差別者である Julie と結びつけられる Mississippi 川が、ときに暴力的な強制力を伴ってほかのものを包摂していく様子を、マイノリティたちが差別される社会構造そのものの凌駕や無効化と重ねわせ、Ferber が差別構造の脆弱性を示唆しているのではないかと論じてきた。さらにいえば、*Show Boat* の主人公 Magnolia はまさに、Mississippi 川そのものである。「黄色い」価値観に共鳴し、敢えて被差別者側に身を置きながらも、彼女は悲劇的な運命を鮮やかに回避してまるで川のように “unconquerable”（299）な存在となる。

Magnolia が夫 Gaylord とのシカゴでの生活にすばやく馴染んだことを示す以下の文章は、彼女の性質の本質を表現している。

> It was incredible that Magnolia Ravenal could so soon have adapted herself to the life in which she now moved. Yet it was explicable, perhaps, when one took into consideration her

inclusive nature. （202,下線筆者）

彼女は決して、その名前が示すような「白い」女性ではなく、「黄色」に親しみ、憧憬の念を抱き、さらには自ら「黄色」になり、その“inclusive”な性質で「黄色」の価値観を波及させて、アメリカ社会に深く根ざす人種や職業における差別構造を無効化していく、極めて包摂力のある Ferber 的な[10]ヒロインである。

## 結び

本稿は色を起点として、*Show Boat* の Mississippi 川と女性登場人物たちの関わりについての解釈を試みた。Ferber は、アメリカ南部の人種差別的なコンテクストのなかでネガティブな印象を与えられていた“yellow”がときに“golden”になる様子や、包摂力を伴う Mississippi 川の描写を通して、非差別者・非搾取者である女性たちがただ弱者として存在したわけではなく、自身を差別するものをも自らのなかに取り込んでいくことで、自らの価値観や領域を波及させていく懐の深さや力強さを持っていたことを示唆した。

「黄色」のイメージを通して小説の主要な要素である混血女性・川・劇場と主人公が視覚的に結びつき、ときに「黄金」に光り輝きながらその力強さを発揮し、差別構造を乗り越えていく過程を描く *Show Boat* は、Ferber の小説のなかでも特に読者の想像力を刺激する技巧に富んだ作品と言えるだろう。

## 註

[1] ミュージカルとしては、1927 年に作曲ジェローム・カーン、作詞・脚本をオスカー・ハマースタン2世が担当したものがブロードウェイで初演されて以来、世界中で幾度となく再演されている。映画は、1929 年、1936 年、1951 年にそれぞれハリー・A・ポラード、ジェームズ・ホエール、ジョージ・シドニー監督によって製作された。

[2] *Edna Ferber's America* に収録の “A Pinprick of Blood: *Show Boat*”より

[3] *Edna Ferber's Hollywood: American Fictions of Gender, Race, and History* に収録の “Making Believe: Show Boat, Race, and Romance, 1925-1957”より

[4] “Ol' （wo）Man River?: Broadway's Gendering of Edna Ferber's Show Boat.”より

[5] Smyth, Jennifer E. *Edna Ferber's Hollywood: American Fictions of Gender, Race, and History*. U of Texas P,2010. *Google Book Search*. Web. 15 Aug. 2016.より
ここで Smyth は Ferber が実際に起きた事件をもとに Julie と Steve の異人種同士での結婚が暴かれる場面を描いたことを紹介し、そこで mixed-race woman が一般的に“yellow girls”と称されていたことを記している。

[6] 当時の南部では悪名高い One-Drop Rule（黒人の血が一滴でも混ざっていれば、その人物を「黒人」と分類する法的な人種分類）とそれに基づき黒人と白人の結婚を禁じる法律があった。

[7] ここでは Julie が女性であり、まずジェンダー上の枠組みで当時の社会のなかでマイノリティの立場であったということを議論の前提としておいている。

[8] Mississippi 川は Magnolia にとって“A wild sense of freedom”(35)を象徴するものであったと書かれる。また、Julie と一緒に船の外に遊びに行く時間は、Magnolia にとって Parthy の支配から解放される自由な時間であった(88)

[9] Andy 個人としては、Basque 系で肌の色が浅黒く、Julie やマイノリティの味方である男性であったため、典型的な「白人男性」とは言えないが、彼がヨーロッパ系であり、アメリカ南部の基準で言えば「白人」に分類されるであろうことと、「船長」という一座で最も権威的な立場にある人間であることもまた事実である。

[10] Ferber は *Fanny Herself*(1917)、*So Big*(1924)、*Cimarron*(1930)、*Giant*(1954)等ほかの作品でも一貫して社会的な差別に抗う inclusive なヒロイン像を描くことを得意とした。

## 参考文献


Berlanstein, Lenard R. *Daughters of Eve: A Cultural History of French Theatre Women.* Harvard UP,1992.

Breon, Robin. “‘Show Boat’: the past revisits the present,” *Canadian Theatre Review.* (Summer/Fall) 1994. 70-9.

Ferber, Edna. *Show Boat*. Vintage Books, 2014.

McGraw, Eliza. *Edna Ferber's America*. Louisiana State UP, 2014.

Smyth, Jennifer E. *Edna Ferber's Hollywood: American Fictions of Gender, Race, and History*. U of Texas P, 2010.*Google Book Search*. Web. 15 Aug. 2016.

Wood, Bethany. “Ol' (wo) Man River?: Broadway's Gendering of Edna Ferber's Show Boat.” *Studies in Musical Theatre,* 4.3. 2010. 21-330.

# The Inclusive Nature of the Mississippi River and Magnolia
## —An Analysis of "yellow" and "golden yellow" in *Show Boat*—

Karen Nishioka

**Summary:** *Show Boat*, published in 1926, is one of the most well-known and commercially successful novels among Edna Ferber's works. Despite being widely regarded as a novel that revolves around racial problems, few critics have mentioned that the Mississippi River, which is the main setting of the novel, is repeatedly described as "yellow," "tawny," or "golden yellow," thereby visually connecting it with the mixed-race women commonly known as "yellow girls."

In this thesis I will explore how the river represents the values of those "yellow girls," who were the target of sexual exploitation and social discrimination back then. I will also argue how Magnolia, the white protagonist in the novel, becomes deeply attracted to the colour of "yellow," empathizing and even blending her identity with the "yellow girls."

Then I will conclude that in this novel, Ferber tries to insist how fragile and nonsensical the structure of exploitation and discrimination is by depicting the "yellow" river as far from being powerless and weak – instead, it becomes "golden yellow" and tries to swallow everything, including the ones that exploit and discriminate the "yellow girls."